

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12329

研究課題名(和文)大学生ピアおよびITを活用した高校生のデートDV予防支援プログラムの開発・評価

研究課題名(英文) Development and evaluation of a high school student dating DV prevention support program utilizing university student peers and IT

研究代表者

村井 文江 (Murai, Fumie)

常磐大学・看護学部・教授

研究者番号：40229943

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ヘルスブリーフモデルを基盤にして、ヘルスリテラシーの行動である情報収集、相談行動およびこれらの行動への支援行動の促進を目的にプログラムを開発・評価した。高等学校13校(2551名)から協力が得られた。交際経験者において、デートDVとなる行為をされたことのある人は男子97名(20.6%)、女子278名(35.2%)であった。デートDVと認識している行為について、必ずしもしてほしくないとは考えていなかった。プログラムの結果、情報を収集するなどの予防行動をとれる高校生もいたが、十分な割合には達しなかった。高校生のデートDVについての認識等を再度確認して、プログラム内容を再検討する必要が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高校生に対するデートDV予防プログラムを構築し、その評価を行った。プログラムによって、デートDV予防に関する情報収集をすることや相談行動をとれることを目標とした。情報収集については、実施されたが、プログラムで目標とする数値には到達しなかった。高校生は、デートDVと認識している行為について、必ずしも、恋人からされたくないとは考えていない状況もあり、アプローチの方法を再検討する必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Based on the health belief model, a program was developed and evaluated for the purpose of promoting information gathering, counseling behavior, and support behavior for these behaviors of health literacy. Cooperation was obtained from 13 high schools (2551 people). Among those who had experience of dating, 97 were males (20.6%) and 278 were females (35.2%) who had been acted as dating DV. High school students didn't want their partner not to do what they perceive as dating DV. As a result of the program, some high school students were able to take preventive actions such as collecting information, but not enough. It was suggested that it would be necessary to reconfirm the content of high school students' dating DV and reconsider the program content.

研究分野：母性看護学

キーワード：デートDV予防 ヘルスリテラシー ヘルスプロモーション 高校生

研究開始当初の背景

デート DV は、思春期の健康を障害する要因である。デート DV の結果として、心身の不調、睡眠障害、異性や外出への恐怖などの生活に変化をきたすような健康問題が、被害者の約半数に認められる（内閣府、2015）。デート DV の1つである性的暴力で考えると、望まない妊娠や性感染症の罹患、さらには精神的健康の不調までおよぶ健康問題へと広がっていく。海外においては、デート DV が傷害事件、薬物使用、自殺未遂につながる（Wolfe et al., 2009）ことが指摘されている。わが国においてもデート DV によって命に危険を感じた経験を 5 人に 1 人がしている（内閣府、2015）ことが報告されており、命に関わる問題として認識し支援する必要がある。

高校生におけるデート DV の発生頻度は、交際経験者の 30%前後と推測される（柿崎ら、2008；横浜市、2008；西村、2013；日本性教育協会；2013、内閣府、2015）。デート DV を予防するための支援は、行政を中心に進められ（横浜市、2008；下敷領、2010；NPO 法人ウィメンズネット・こうべ、2012；山田ら、2012；八代、2013；風味ら；2014）、相談体制の整備も着手されるようになっている。

しかし、これらの支援にはいくつかの課題がある。主な課題を 3 点挙げると、1) デート DV 予防に対する当事者意識が持ち難い、2) 相談システムが十分に活用されていない、3) これらの支援の評価は、実践報告に終わっており評価が示されていないことである。これらの課題を踏まえ、実践学としてデート DV 予防のための支援プログラムを開発し評価することが必要である。特に、高校生は交際経験が増加し半数におよぶ時期であり、デート DV 予防支援の対象として適切と考えられる。したがって、今後のデート DV 予防支援に寄与し思春期の健康を支援する研究として、高校生を対象としたデート DV 予防プログラムを開発・評価することとした。

研究の目的

1. 研究課題申請時には、以下の 3 点を研究目的として掲げた。

1) 高校生を対象としたデート DV 予防支援のプログラムの内容、実施方法（プログラム開発）

2) デート DV 予防支援プログラムの評価（実施後 6 か月）

啓発教育の評価として、デート DV 予防行動に関する態度、規範、意図の変化および行動変容：
ピア・エデュケーションと講演を比較する

相談システムの評価として相談実施状況、相談内容の解決状況など

3) 大学生ピアのデート DV 予防に対する意識および行動変容（質的分析）

2. 研究目的の変更及び最終的研究目的

研究課題申請後の研究環境の変化に伴い、当初の計画であったピア・エデュケーションを実施することは、困難となった。そのため、計画を変更し、研究目的を、高校生が、自分たちがデート DV の当事者であることを認識し、デート DV を予防するための行動（以下、デート DV 予防行動とする）として、情報収集、相談行動およびこれらの行動への友だちとしての支援行動がとれることを支援するプログラムを作成し、評価することとした。当初の計画通り、IT 活用は維持した。

研究方法

1. 高校生に対するデート DV 予防行動支援プログラムの構築

目的の変更により、再度、文献検討を実施し、ヘルスビリーフモデルを基盤にして、ヘルスリテ

ラシーの行動である情報収集、相談行動およびこれらの行動への友だちとしての支援行動を促進できるように開発した。支援プログラムは、講義とwebによる情報提供および相談から構成した。

1) 講義による支援プログラム

講義は、高校の授業における実施可能性を考慮し1コマ50分の講義とした。講義は情報提供の支援と位置づけ、内容は、ヘルスリテラシーの行動を促進することを目的とし、ヘルスビリーフモデルの4つの信念と自己効力感を柱に構成した。講義によって、以下のことが達成できることを目標とした：「問題の起こりやすさ」として、デートDVがいかに身近なものであるかを認識できる、「問題の重要性」として、デートDVの重大さについて認識すると共にデートDVを予防する必要性とひとりで問題を抱えることのリスクを理解できること、「行動の利益(効果)」として、情報をとることや相談することでデートDVの対処方法等が見出せ解決に向かえる、および友人を支援することで友人が必要な情報がとることや相談することの行動をとり問題が解決していくことが認識できる、「行動の障害(バリア)」として、情報収集や相談することができそうであると思える、「自己効力感」は、本研究で挙げている7つのデートDV予防行動をとることができる自信であり1つ以上の行動に対してできそうであると思える。

2) webによる支援

Webサイト「with YOU 高校生のデートDV予防」を作成した。webによる支援は、情報提供と相談から構成した。相談は、情報を入手する場であり、入手した情報の理解、評価を助け活用を促すものと位置づけた。webの情報は、名刺大のカードを配布することで提供した。

webによる情報提供は、講義の内容を中心としたデートDV予防に関連する知識と情報、デートDV予防に関連する信頼できる情報サイトやYouTubeなどの動画等の紹介、デートDVに関連する相談の紹介から構成した。相談支援は、webを用いて相談を受けるものである。なお、webにおける相談の限界については予め周知した。

2. プログラム評価

1) 研究デザイン

非ランダム化比較研究である。高校単位で講義による支援プログラムを実施する介入群と実施しない非介入群に分け、支援プログラムの効果を検討する。なお、非介入群には、web支援プログラムの情報提供のみカードで行う。

2) 研究対象者

全日制高等学校に在籍する生徒とする。事後6か月の質問紙調査まで在籍し、日本語で書かれた質問紙の内容を理解し回答できる者とした。成人している人、結婚している人、出産経験がある人は除外する。

3) 統計的分析

IBM SPSS Statistics26を用いて分析を行い、有意水準は0.05とした。

4) 倫理的配慮

常磐大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:100090)。同意については、自由意思を保障し、研究目的等がわかり協力してもよいと判断した場合に、チェックをいれてもらう形式とした。また、重症な相談があった場合には、より適切な支援に繋がることを本人に提案するとともに、了解のもと第三者に相談することを明示した。

研究成果

1．高校生に対するデートDV予防行動支援プログラム

「with YOU 高校生のためのデートDV予防サポート」サイトを立ち上げた。こちらで情報提供するとともにメールによる相談体制を整えた。

2．高校生のデートDVとなる行為についての認識および予防行動

13校から研究協力が得られた。内1校は、事前調査のみの協力である。13校、2551名から得られたデータから、高校生のデートDVに関する意識や現状について明らかにした。

調査に同意し全ての質問に回答している2138名（有効回答83.8%）を分析対象とした。1年生562名（26.3%）、2年生1577名（73.7%）であり、男子850名（39.7%）、女子1288名（60.2%）であった。交際経験者は、過去に経験のある880名、現在交際している379名を合わせ58.9%であった。性行為経験者は150名（7.0%）、交際経験者に対しては、11.9%であった。「青少年の性行動全国調査」の2011年2017年と比較して、交際経験率は同様であるが、性交経験率は低い集団であった。

デートDVとなる行為をすること、されることには、したことがあることよりされたことの認識割合が高かった。交際経験者1259名において、デートDVとなる行為30項目について恋人にしたことがある人は、男子69名（14.7%）、女子127名（10.1%）であった。同様に恋人からされたことがある人は、男子97名（20.6%）、女子278名（35.2%）であった。どちらにおいても一人の高校生が経験している行為は5項目以下がほとんどであった。また、体験率の男女差では、することも含め女子が多く体験している傾向があった。

友だちから経験を聞いたことは交際経験に関係なく質問し、男子342名（40.2%）、女子611名（47.4%）に経験があった。30項目全てについて聞いたことがあるとした人が31名（1.4%）存在したが、男子71.9%、女子78.9%は5項目以下であった。行為の経験率で男女に有意差が認められたのは14項目であり、13項目において男子に多い結果であった。高校生においてデートDVのことが話題になっていることがわかる。しかし、後述するように、デートDVとなる行為をデートDVと認識している割合が高くないという結果も示されており、高校生において、デートDVがどのように取り扱われているかは当事者の言葉から検討していく必要があると考える。

デートDVとなる行為30項目について、デートDVと思う認識は、男子25.1～75.4%、女子14.5～84.2%であった。また、恋人からされたくないについては、男子41.1～62.6%、女子40.9～77.8%であった。デートDVとなる行為としての認識が低い傾向ある事に加え、されたくないという認識も低い傾向が示された。

デートDVとなる行為であるという認識とその行為を恋人からされたくないとの関係については、デートDV行為のタイプによる違いが認められた。支配や束縛行為は、デートDVと思う人は3割程度であるが、恋人からされたくない人は7割程度である。言葉による行為は、デートDVと思うと恋人からされたくない割合の差が少なく、どちらも6割前後であった。金銭に係る行為も同様である。身体的行為は、7～8割がデートDVと認識しているが、されたくないと思っている人は減少し5～6割程度である。性に関するデートDV行為も身体的行為と同様である。これらの関連を統計的に見ると、デートDVになる行為と思わない人で恋人からされたくないと思う人が多く、デートDVと認識している行為を恋人からされたくないと思うわけではないことが明らかになっ

た。このことは、高校生に対して知識提供を中心としたプログラムの実施をしても、デートDVに関する問題解決にならないことを示唆している。

デートDVの可能性について、自分自身がする可能性について、男子528名(62.1%)、女子609名(47.3%)は全くないと認識していた。同様に、自分がデートDVを受ける可能性については、男子575名(67.6%)、女子902名(70.0%)が全くないと回答していた。一方、高校生にデートDVが起こる可能性については、全くないという認識は男子154名(18.1%)、女子125名(9.7%)であった。友人からデートDVに関する話も聞いており、デートDVの存在は理解しているが、自分に生じることとは考えにくい状況が推測される。デートDV予防行動として、情報をとる、話をするなどの行動している人は、男女共に1割前後であった。

3. 高校生に対するデートDV予防行動支援プログラムの効果

12校(2227名)：介入群6校(987名)、非介入群6校(1240名)で実施した。事前および6か月のアンケートの両方に回答し、調査に同意しており、リスク行動等の属性を除くすべての質問に回答している1525名(有効回答67.8%)を分析対象とした。1年生446名(29.2%)、2年生1079名(70.8%)であり、男子593名(38.9%)、女子932名(61.1%)である。交際経験者は、過去に経験のある612名、現在交際している252名を合わせ56.7%であった。性行為経験者は89名(5.8%)、交際経験者に対しては、10.3%であった。事前調査の集団に比較し、交際経験率および性交経験率、デートDVとなる行為をした・受けた体験率が低い傾向があり、対象集団の偏りが生じている可能性がある。

6か月間でデートDVについての情報収集をした人は、介入群183名(29.1%)、非介入群140名(15.6%)であり、研究で作成したwebサイト「withYOU 高校生のためのデートDV予防サポート」を閲覧した人は、介入群72名(11.5%)、非介入群39名(4.3%)であった。webサイトを閲覧しなかった理由としては、自分には関係ないと思ったから、興味がなかった、なんとなくがそれぞれ3割を超えていた。友だちとデートDVやその予防について話をした人は、介入群156名(24.8%)、非介入群173名(19.3%)であった。いずれも、事前より増加し、増加率は介入群のほうが多かった。自分自身がデートDVになる可能性を認識する率も上昇したが、デートDV予防行動をとることの自己効力感およびデートDVとなる行為の明らかな減少は認められなかった。

1回の講義によってデートDV予防に関する行動をとることのできる高校生はいるが、十分な割合には到達していない。デートDVと認識してもその行為をされたくないとは思わない状況もあり、高校生のデートDV行為に対する考え方を再度確認して、支援プログラムを構築していく必要が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 村井文江、坂間伊津美、猿田和美	4. 巻 1
2. 論文標題 健康問題としての高校生・大学生のデートDVの現状と予防の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 常磐看護学研究雑誌	6. 最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

with YOU 高校生のデートDV予防サポート https://tkws.jp/tokiwa/withyou/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川野 亜津子 (Kawano Atsuko) (10550733)	筑波大学・医学医療系・准教授 (12102)	
研究分担者	坂間 伊津美 (Sakama Izumi) (40285052)	常磐大学・看護学部・教授 (32103)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	島田 智織 (Shimada Chiori) (90347245)	茨城県立医療大学・保健医療学部・教授 (22101)	
研究 分 担 者	猿田 和美 (Saruta Kazumi) (30826904)	常磐大学・看護学部・講師 (32103)	